

# 「わけだ」と他の文末のモダリティ表現との違い — 「のだ」との比較を通して —

杉江厚美

名古屋外国語大学大学院

## Abstract:

“WAKEDA” is one of the sentence-final modal expressions. Sugie (1996) proposed five classifications of “WAKEDA” as follows, reconsidering the analyses of Teramura (1984) and Morita & Matsuki (1989), and adopting the analysis of Kitagawa (1995).

- Type 1: Logical consequence
- Type 2: Natural understanding
- Type 3: Suggesting other meaning, Paraphrase
- Type 4: Reinforcing of certainty
- Type 5: Discourse modality indicator

Because “WAKE” in “WAKEDA” has the meaning of “the course of cause and effect”, these 5 “WAKEDA” can be diagramed as “ $P \rightarrow Q$ ” consistently. However, Type 1- Type 4 are diagramed as “ $P \rightarrow Q$ ” at proposition level, and Type 5, at speech act level.

This paper argues that “the reasoning process of  $P \rightarrow Q$ ” always existing in “WAKEDA” is the key to explaining the difference between “WAKEDA” and other sentence-final modal expressions, through comparison with “NODA”.

## 0. はじめに

文末のモダリティ表現の一つとされる「わけだ」は、同じ範疇に属する「のだ」などに比べると使用頻度はそれほど高くなく、そのせいか単独での体系的な研究はほとんどなされてこなかったと言える。そこで、杉江 (1996) では、寺村 (1984)、森田・松木 (1989) の分析をベースに、それらを再解釈、再配置し、さらに、北川 (1995) の分析も考慮に入れて「わけだ」の新たな五分類を次のように提案した。

- タイプ 1 論理的帰結を表す用法
- タイプ 2 納得を表す用法
- タイプ 3 言い換えを表す用法
- タイプ 4 確実性の補強を表す用法
- タイプ 5 談話のモダリティ標識としての用法

「わけだ」の「わけ」が「因果の筋道」<sup>1)</sup> という意味を持つことから、これらは「 $P \rightarrow Q$ 」

の図式で統一的に表されるものとする。ただし、タイプ1-タイプ4は命題のレベルで、タイプ5は言語行動のレベルで「 $P \rightarrow Q$ 」と表されるものである。

本論文では、「わけだ」に常に存在する「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が、「わけだ」と他の文末のモダリティ表現との違いを明らかにするカギになっていることを、「のだ」との比較を通して示していく。

## 1. 「わけだ」の異なる五用法

杉江 (1996) で提案した「わけだ」の五分類を概観する。

### 1.1 論理的帰結を表す用法 (タイプ1)

寺村 (1984) の言う「ある  $Q$  という事実に対し、なぜそうなのかを説明するために、明らかな既定の事実  $P$  をあげ、そこから推論すれば当然  $Q$  になる、ということを用いた言いかた」(p. 285)、森田・松木 (1989) の「既成の事実や成り行き、道理などから必然的にある結論が導き出されることを表す」(p. 196) 用法に当たるものである。ここでは「論理的帰結」を表す用法と呼ぶ。

例文を見てみよう。

- (1) 信吾は東向きに坐る。その左隣りに、保子は南向きに坐る。信吾の右が修一で、北向きである。菊子は西向きだから、信吾と向い合っているわけだ。 (寺村:p. 274 川端康成「山の音」)

P: 信吾は東向きに坐る、その左に保子が南向きに坐る

信吾の右に修一が北向きに坐る、菊子は西向きだ

Q: 菊子は信吾と向い合っている

- (2) 彼は昭和 27 年生まれだから、今年 50 歳になるわけだ。

P: 彼は昭和 27 年に生まれた、[昭和 27 年は西暦 1952 年だ]

Q: 彼は今年 50 歳になる

P は「既に事実として確認されている事柄」(寺村: p. 277) 「明らかな既定の事実」とする。Q は、その P からの推論によって必然的に導き出される結論ということになる。

ここで、Q の表す事象について観察してみる。(1) では「菊子は信吾と向い合っ

いる」ことで、これは、発話時点で既実現されている事象と言える。最後の文を「菊子は西向きだから、信吾と向い合うわけだ」とすれば、Qに当たる「菊子は信吾と向い合う」ことは、未実現の事象になる。(2)ではQは「彼は今年50歳になる」ことで、彼が今年のいつ誕生日を迎えるかによって、発話時点で既実現されている事象とも、これから実現される事象とも言える。つまり、この用法では、Qの表す事象は発話時点で既実現、または実現することが確定している未実現のものと考えられる。Qが発話時点で既実現、未実現を問わないという点に注意したい。

## 1.2 納得を表す用法 (タイプ2)

森田・松木 (1989) の「ある事実について、どうしてそうなのか疑問に思っていたところ、その答えとなるような他の事実を知って納得した、という状況を表す。事の真相を知って、現状が当然の帰結であったと悟る場合」(p. 198) である。ここでは「納得」を表す用法と呼ぶ。Qという言明に対する納得の気持ちを表すもので、普通、その納得をもたらすもととなった既定の事実 P が、多く「のだから」を伴って、Qに前接または後接する。

寺村 (1984) において、この用法に当たる記述が見られないのは、納得を表す用法が、タイプ1の論理的帰結を表す用法の下位分類とも考えられるからだと思う。しかし、論理的帰結を表す用法において、Qは発話時点で既実現されているか、または実現が確定している未実現の事象で、既定の事実 P からの推論によって必然的に導き出される結論であるのに対して、納得を表す用法では、Qは既知のあるいは目前にある事実で、他の事実 P に根ざした当然の帰結であることから、納得を表す用法を、論理的帰結を表す用法とは別のタイプとして扱うこととする。

ここで「わけだ」が強いアクセントを保持するという、他の用法と異なった発音上の特徴を持つことに注意したい。他の用法の「わけだ」は、それに先行する部分(たとえば動詞+時制)がアクセント型の場合は、それにつながって「ダウンドリフト」を起こすが、タイプ2の納得を表す用法では、ダウンドリフトを起こさずに、アクセントの山が二つ保たれる。

### (3) ダウンドリフトの現象

高い山を持った二つの句が連結された場合、二番目の山が低いピッチで発音される現象

例) 泳いで (L-H-L-L) +みる (H-L) →泳いでみる (L-H-L-L M-L)  
(H=high level pitch tone, M= mid level pitch tone,  
L=low level pitch tone) <sup>2)</sup>

(4) 単独の発音：わけだ (H-L-L)

(5) タイプ2以外の用法：

アクセント型：あるわけだ (H-L M-L-L) ダウンドリフトあり

非アクセント型：いるわけだ (L-H H-L-L) <sup>3)</sup>

(6) タイプ2の用法：

アクセント型：あるわけだ (H-L H-L-L) ダウンドリフトなし

非アクセント型：いるわけだ (L-H H-L-L) 二番目の H の方が幾分高い

タイプ2の用法の場合は、「わけだ」に先行する部分がアクセント型であっても非アクセント型であっても、「わけだ」の「わ」のピッチが、先行する語の高ピッチよりも高く感じられる。これは、タイプ2の用法を他の用法から明確に区別する音韻的特徴である。

次の二つの例文を検討してみよう。

(7) 「あかないわけです。かぎが違っているのですから。」(森田・松木：p. 198)

(8) 2ヵ月もまとまった雨が降っていないのだから、水不足になるわけだ。

「ある事実について、どうしてそうなのか疑問に思っていたところ、その答えとなるような他の事実を知って納得した」とは、「道理で」という副詞一語の表す概念と言える。したがって、この用法の「わけだ」は「道理で」となじみやすい。

(7) (かぎが違っていることに気づいて) 道理であかないわけです。

(8) (2ヵ月もまとまった雨が降っていないことを知って) 道理で水不足になるわけだ。

ここでも、Qの表す事象を観察してみる。(7)では「(ドアが) あかない」こと、(8)では「水不足になる」こととなっている。(7)は「(ドアが) あかない」ことが確認された後で、かぎが違っていることに気がついて(ドアが) あかないのももっともだと納得する意である。同様に、(8)は「水不足になる」ことが既に実現している状況

で、2カ月もまとまった雨が降っていないことを知り、水不足になるのも当然だと納得する意を表す。これらの事象が、発話時点ですべて実現済みであることは、注目に値する。なぜなら、タイプ1の論理的帰結を表す用法では、Qの表す事象は、発話時点で既実現、未実現を問わなかったからである。

### 1.3 言い換えを表す用法 (タイプ3)

ここで言う「言い換え」を表す用法とは、寺村(1984)が「Pという聞き手に身近な事実をあげ、その事実は、ある角度、観点から見るとQという意味、意義がある、ということ聞き手に気づかせようとする言いかた。『言いかえると……』というぐらいの軽い感じの場合もある」(p. 285)とやっているのと同じものを指し、森田・松木(1989)が「ある事柄について、別の観点から見るとこのような言い方ができる、このような意味にもとれる、ということを表す。“言い換えると……”“要するに……”ぐらいの気持ちである」(p. 197)とやっている用法のことである。「わけだ」によって、Pという事実がQという意味を持つことを示唆する言い方と、「言い換えると……」「要するに……」「つまり……」という気持ちを表す言い方とがあるが、どちらも同一の意味範疇に属すると考える。

最初に、Pという事実がQという意味を持つことを示唆する言い方の例を見てみよう。

- (9) 晩になってから急に風が落ちて暖かくなった。しかし、中区区役所に集まっている家のない労働者の群れには、外套を持っている人たちよりも、ずっと冬が長いわけで、舗道や空地に集って暖をとっているのが、赤く燃える火の周囲に立ったり、しゃがんだりして寒々と黒い絵となっている。

(寺村:p. 280 大仏次郎「帰郷」)

この例において、Pは「晩になって暖かくなった」こと、Qは「家のない労働者の群れには、ずっと冬が長い」こととなっている。筆者は、おそらく家も外套も持っているであろう読者に対して「晩になって暖かくなった」という事実を、家も外套も持たない労働者たちに目を向けてみれば、彼らには、まだまだ寒い冬が続く、「彼らには、ずっと冬が長い」という解釈を加え、「わけ」を用いて提出しているのである。

次の例は、上の用例に近いものと思われる。

(10) A：明日の夜、久しぶりに大学時代の友だちに会うことになったの。

B：帰りが遅くなるというわけね。

この例で、Aが翌日の予定「夜、大学時代の友人に会う」こと(P)をBに伝えるが、Aが意図していたか否かにかかわらず、Bは「帰宅時間が遅くなる」(Q)という解釈を加えていると考えるわけである。

次に「わけだ」が「言い換えると……」「要するに……」「つまり……」という気持ちで使われている例を見ることにしよう。

(11) 広中：(前略) 日本ではなにか大きな仕事をすると、あとは利子で食っていきけるというようなところがある。学会の行政面での指導的地位につくとかね。現役の学者ではなくなるわけだ。……

(小澤征爾・広中平祐『やわらかな心をもつ-ぼくたちふたりの運・鈍・根-』)

(11) で P に当たるものは「学会の行政面での指導的地位につく」ことであり、その P は「要するに、現役の学者ではなくなるわけだ」(Q)と言い換えられている。

#### 1.4 確実性の補強を表す用法 (タイプ4)

寺村(1984)が「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程は示さず、Q ということ、自分がただ主観的にそう言っているのではなく、ある確かな根拠があつての立言なのだということ、を言外に言おうとする言いかた」(p. 285)としているもの、また、森田・松木(1989)が「既成の事実や既定の事柄を再確認するニュアンスで用いる」(p. 198)としているものを、ここでは「確実性の補強」を表す用法と名づける。この用法は「Q わけだから」の構文に多く用いられ、「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」を提示することなく「わけ」によって P が言外に存在することを示し、その立言の確実性を補強するものである。

例文を見てみよう。

(12) 1 週間はいないわけだから、新聞の配達を止めてもらおう。

(13) 広中：アメリカでは給料にしても、六十ぐらいで昔いい仕事した人よりも、三十ぐらいでどんどんいい仕事をしている人の方が高いわけだ。

(小澤・広中 前掲書)

(12) では、既に決まっている旅行や帰省などの日程を確認しながら「1週間は（家に）いない」こと（Q）を再確認していると言える。(13)において、話し手は、「アメリカでは、六十ぐらいで昔いい仕事をした人よりも、三十ぐらいでどんだんいい仕事をしている人の方が、給料が高い」こと（Q）を、既成の事実としてとらえているというよりは、むしろ「<それにはいろいろ理由があり、いまそれを一々述べ立てることはしないが、それなりの必然性があるのだ>ということを示そうという心理」（寺村：p. 283）の下に発話していると言えよう。それぞれ、Qの根拠となるべきPは述べられていないが、「P→Qという推論の過程」の存在がうかがわれ、立言Qの確実性が補強されることになる。

### 1.5 談話のモダリティ標識としての用法（タイプ5）

これまでに見てきたタイプ1-タイプ4の四用法においては、「わけだ」によって「P→Qという推論の過程」、何らかの原因結果関係が示されていた。

では、次の例文はどうであろうか。

(14) こうして二人は結婚して、幸せに暮らしたわけです。

（森田・松木：p. 196）<sup>4)</sup>

(15) ここで犯人が目撃されたわけです。

(16) わたしは終戦を迎えたのがちょうど一高の二年の時だったわけですが……

（北川（1995）p. 91 加賀山朝雄「昭和史」『中央公論』1989. 3）（下線は筆者による。）<sup>5)</sup>

(17) ハーバードでの先生はザリスキー（Zariski）です。京大を訪ねて来られたとき（1956年）初めて会って、彼にすすめられてハーバードに留学、彼の指導の下で博士号をとったわけです。

（小澤・広中 前掲書 広中より萩元晴彦あて書簡）

(18) 小澤：あれはね、もう、死ぬほど――大げさにいえばほんとに息がなくなるくらいまで走らされちゃうわけよ。目の前が黄色くなるわけ。それでも、倒れてもまた起（た）たなきゃいけないっていう、意志力。タックルされてやられてもだめだし、とにかく肉体を意志で前へ前へとやらせるわけよね、ラグビーは。

（小澤・広中 前掲書）

- (19) 広中：だけどさ、数学でもさ、それはもちろんそういうふうに、非常にテクニクの部分もあってさ、ほんとにもう、数学者同士でなくちゃあ話してもわからないようなところがあるよね。だけどまあ、いちばん大切なところっていうのはアイデアなわけよ。で、アイデアの部分っていうのはさ、ほんとに話す気になれば誰にでも話せるわけだよ。 (同上)

これらの例文には、タイプ1-タイプ4に見られたような「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が存在しないようだ。「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」の存在しないこの用法は、寺村(1984)の分析では説明されないものと言ってよいだろう。

しかし、このような見方もできる。北川(1995)の分析を見てみよう。

北川は、このような「わけだ」を「談話のモダリティ標識」ととらえる。そして、この談話のモダリティ標識としての用法において、他の用法に見られた「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」、何らかの原因結果関係の提示が不在であるとするのではなく、 $P$ を言語行動における発話者自身の発話の「動機」、 $Q$ をその結果の「立言」と解釈し、他の用法と同様に「 $P \rightarrow Q$ 」の図式を適用する (p. 94)。

談話のモダリティ標識としての「わけだ」の機能は「発話者がストーリー・テラー、『語り部』の役柄を自らに課することを表示することにある」(p. 89)とされている。このような「わけだ」は、自分のなわ張り内に属する情報を話し手が内部者として解説・説明しながら外部者に伝えようとする発言の場で現れるものである (p. 95)。

ここでもう一度、先ほどの例文を見よう。(14)は文字どおりストーリー・テラーの発話と考えられる。(15)のような表現は、お茶の間向けに社会的な事件、出来事から芸能界の話題までを伝えるテレビ番組などで、よく耳にする。レポーターと呼ばれる人が、事件などの現場に赴き、報道解説する場面で現れるものである。(16)ではエッセーの筆者である加賀山氏の直接体験が、(17)では手紙の書き手である数学者広中氏自身の経歴の一部が、(18)では話し手である指揮者小澤氏自身の経験が、(18)では話し手の専門分野である数学に関することが「わけだ」の文で述べられている。それぞれストーリー・テラーの役柄自体が、発話の動機となっているという説明が可能である。

「発話者自身の発話の動機  $P$  がその結果として立言  $Q$  を惹起する」というのが、タイプ5の談話のモダリティ標識としての「わけだ」ということになる。



## 1.6 「わけだ」の五用法のまとめ

1.1-1.5 に示した「わけだ」の五用法を一覧にする。

	用法	特 徴	図式
タイプ 1	論理的帰結を表す	既定の事実 P から推論によって必然的に結論 Q が導き出される	$P \rightarrow Q$
タイプ 2	納得を表す	既実現の事象 Q は既定の事実 P からの当然の帰結であると納得する	$P \rightarrow Q$
タイプ 3	言い換えを表す	P という事実が Q という意味を持つ P を言い換えると Q になる	$P \rightarrow Q$
タイプ 4	確実性の補強を表す	言外にある P によって Q の確実性を補強する	$(P) \rightarrow Q$
タイプ 5	談話のモダリティ標識	発話者自身の発話の動機 P がその結果として立言 Q を惹起する	$P \rightarrow Q$

このように「わけだ」の文は、命題のレベル（タイプ 1-タイプ 4）と言語行動のレベル（タイプ 5）のレベルの違いはあっても、すべて「 $P \rightarrow Q$ 」の図式で表される。「わけだ」に「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が常に存在するのは「わけだ」の「わけ」の持つ「因果の筋道」という意味によるものであろう。

## 2. 「わけだ」と「のだ」との比較

ここでは、「わけだ」に常に存在する「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が、「わけだ」と他の文末のモダリティ表現との違いを明らかにするカギになっていることを、野田 (1997) が、ムードの「のだ」のうち「関係づけ」の「のだ」とする用法等との比較を通して示していく。

### 2.1 野田 (1997) による「のだ」の分類

野田 (1997) は「のだ」を<スコープの「の (だ)」>と<ムードの「のだ」>の二種類に分けて考察している。<スコープの「の (だ)」>は、文の一部を名詞化するという構文的な理由で必要とされるものなので、ここでの議論の対象にはならない。<ムードの「のだ」>は、さらに、四種類に分類される。状況や先行文脈への関係づけの有無と、ムードの形式（「対事的」「対人的」）という二つの軸によって十字分類するのである。

関係づけの対事的「のだ」	関係づけの「のだ」が対事的モードだけを担う場合 Pの事情・意味としてQを把握する
非関係づけの対事的「のだ」	非関係づけの「のだ」が対事的モードだけを担う場合 Qを（既定の事態として）把握する
関係づけの対人的「のだ」	関係づけの「のだ」が対人的モードも担う場合 Pの事情・意味としてQを提示する
非関係づけの対人的「のだ」	非関係づけの「のだ」が対人的モードも担う場合 Qを（既定の事態として）提示する

## 2.2 「わけだ」と「のだ」との比較

タイプ1-タイプ4の「わけだ」は、命題のレベルで「 $P \rightarrow Q$ 」の図式で表された。「わけだ」には「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が常に存在するのである。したがって、状況や先行文脈への関係づけのない（非関係づけの）「のだ」を「わけだ」に置き換えることはできないと予想される。

(20) そうか、このスイッチを押すんだ！（非関係づけ対事的）（野田：p. 64）

(21) ? そうか、このスイッチを押すわけだ！

(22) このスイッチを押すんだ！（非関係づけ対人的）（野田：p. 64）

(23) ?? このスイッチを押すわけだ！

(21) は「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」を経た結果の独話としては自然に使えるが、非関係づけの対事的「のだ」のように「このスイッチを押す」ということを、とるべき行動として定まっていたものとして把握する意にはなり得ない。また (23) は、(22) のように聞き手に命令する意味では使えない。

ところが、(24) の非関係づけの対人的「のだ」は、(25) のように「わけだ」で言い換えることができる。

(24) 「あのね、さっき道を聞かれたの。それで、教えてあげたら、すごく丁寧にお礼言われたの。嬉しかったなあ。」（非関係づけ対人的）（野田：p. 101）

(25) 「あのね、さっき道を聞かれたわけ。それで、教えてあげたら、すごく丁寧に  
お礼言われたわけ。嬉しかったなあ。」

(25) の「わけだ」は、言語行動のレベルで「 $P \rightarrow Q$ 」の図式で表されたタイプ5の「わ

けだ」である。

また、野田 (1997) にならって「わけだ」のムードを対事的か対人的かと考えたとき、独話では不自然で、聞き手を必要とする対人的ムードを担うと判断されるのは、タイプ5の談話のモダリティ標識としての用法だけのように思われる。タイプ1-タイプ4の「わけだ」は、一般に独話でも自然に用いられるので、対事的ムードを担うものとする。タイプ1の論理的帰結を表す用法とタイプ3の言い換えを表す用法は、対人的ムードも担うことがある。

そこで、タイプ1-タイプ4の「わけだ」と関係づけの対事的「のだ」、タイプ1とタイプ3の「わけだ」と関係づけの対人的「のだ」、タイプ5の「わけだ」と非関係づけの対人的「のだ」とに分けて比較していくことにする。

### 2.2.1 タイプ1-4の「わけだ」と関係づけの対事的「のだ」

関係づけの対事的「のだ」の例文を挙げ、「わけだ」に置き換えができるかどうか観察してみよう。

(26) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。 (野田 : p. 64)

(27) \*山田さんが来ないなあ。きっと用事があるわけだ。

(26) の「のだ」の文は、「山田さんが来ない」という状況 P から、話し手自身の推論によってその事情 Q「用事がある」ことを導き出していると説明できる。ただし、この場合の推論は主観に基づいたもので、(27) が示すように、論理的帰結を表す「わけだ」で置き換えることはできない。

逆に、タイプ1の「わけだ」の文が「のだ」で言い換えられる例を野田 (1997) から引用する (p. 219)。

(28) 9号「正当防衛だから無罪。ということは正当防衛じゃないことを証明すれば有罪に変えるわけだ」

(三谷幸喜と東京サンシャインボーイズ「12人の優しい日本人」)

(29) 正当防衛だから無罪。ということは正当防衛じゃないことを証明すれば有罪に変えるんだ」

(28) において、話し手・聞き手はともに陪審員ということだ。話し手は、聞き手が

「正当防衛だから無罪に投票した」(P)ならば「正当防衛じゃないことを証明すれば(聞き手は意見を)有罪に変える」(Q)と論理的に結論づけている。一方「のだ」で言い換えた(29)は、文として不自然ではないが、論理的な推論であることは示されない。

次に、野田(1997)が「Pの意味としてQを把握している例」(p. 85)としているものを引用する。

(30) 川崎 数にすると、どのくらいできるんですか。たとえば一週間に。

俵 どのくらいかしら。月に平均二十ぐらいは作っているように思いますが。

川崎 とすると、年間二百ぐらいは作っちゃうんだ。(俵万智『魔法の杖』)

この「のだ」は、次のように「わけだ」に置き換えることができる。タイプ3の言い換えを表す用法に当たる。

(31) とすると、年間二百ぐらいは作っちゃうわけだ。

(30)(31)において、話し手(川崎)は「(歌を)月に平均二十ぐらいは作っているように思う」という俵の発言Pの意味として「(俵が歌を)年間二百ぐらいは作っちゃう」こと(Q)を把握している。ここでも「わけだ」の文と「のだ」の文の違いは、「P→Qという推論の過程」の存在が感じられるか否かにある。

タイプ4の確実性の補強を表す用法の「わけだ」は、「のだ」で言い換えることができる。

(32) 1週間はないわけだから、新聞の配達を止めてもらおう。(= (12))

(33) 1週間はないのだから、新聞の配達を止めてもらおう。

ともに、既に決まっている旅行や帰省などの日程を確認しながら「1週間は(家に)いない」こと(Q)を再確認していると言える。しかし「わけだ」を用いた場合は「P→Qという推論の過程」が暗示され、その立言Qの確実性が補強されることになる。

タイプ2の納得を表す用法の「わけだ」は、「のだ」では置き換えられない。「わけだ」のこの用法において、Qは既実現の事象であるのに対し、「のだ」はそのような

事象ではなく、新たに認識した事実を示すからである。

(34) それじゃ試験に受からないわけだ。

(35) \* それじゃ試験に受からないのだ。

### 2.2.2 タイプ1・タイプ3の「わけだ」と関係づけの対人的「のだ」

タイプ1の論理的帰結を表す「わけだ」とタイプ3の言い換えを表す「わけだ」が対事的ムードだけを担う場合は、2.2.1 で見た。ここでは、この二つのタイプの「わけだ」が対人的ムードも担う場合について、関係づけの対人的「のだ」と比較してみる。

まず、タイプ1の論理的帰結を表す「わけだ」の文を見てみよう。

(36) 「《あさかぜ》が十五番線のホームにはいつてくるのは、十七時四十九分で、発車は十八時三十分です。四十一分間ホームに停車しているわけです。(後略)」 (野田 : p. 222 松本清張『点と線』)

野田 (1997) も指摘するように、(36) では論理的推論による帰結が示されると同時に、「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」を聞き手と共有しようとしていることが表される (p. 223)。「のだ」を用いた (37) では、やはり、論理的な推論であることは示されない。

(37) 「《あさかぜ》が十五番線のホームにはいつてくるのは、十七時四十九分で、発車は十八時三十分です。四十一分間ホームに停車しているんです。(後略)」 (野田 : p. 222)

(36) の「わけだ」の文は「のだ」を後接させ、「わけなんだ」とすることができる。

(38) 四十一分間ホームに停車しているわけなんです。

この場合、「わけだ」が対事的ムードだけを担い、「のだ」が対人的ムードを担うと言えよう。この接続が可能なことから、タイプ1の論理的帰結を表す「わけだ」は、対人的ムードも担うことができるが、基本的には対事的ムードを担う表現だと考える。

タイプ3の言い換えを表す「わけだ」にも同じことが言えそうである。

- (39) ボーナスで母にセーターを買いました。少し奮発したわけです。  
(40) ボーナスで母にセーターを買いました。少し奮発したんです。  
(41) 少し奮発したわけなんです。

(39) (40) は、同じように「P を言い換えると Q になる」という意味を示していながら、ニュアンスの違いを感じさせるであろう。(39) のように「わけだ」を用いると、やはり「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」の存在がうかがわれる。また (41) に示したように「わけなんだ」という接続も可能である。タイプ3の言い換えを表す「わけだ」も、タイプ1の「わけだ」と同様に、対人的ムードも担うことができるが、基本的には対事的ムードを担う表現だと考える。したがって、命題のレベルで「 $P \rightarrow Q$ 」の図式で表されるタイプ1-タイプ4の「わけだ」は、主に対事的ムードを担う表現だと言えよう。

### 2.2.3 タイプ5の「わけだ」と非関係づけの対人的「のだ」

独話では不自然で、聞き手を必要とする対人的ムードを常に担うのは、タイプ5の談話のモダリティ標識としての「わけだ」であろう。この「わけだ」は命題のレベルではなく、言語行動のレベルで「 $P \rightarrow Q$ 」の図式で表される。そして、この「わけだ」を言い換えることができるのは、非関係づけの対人的「のだ」である。

例文を観察してみよう。

- (42) 今朝早く、突然、火災報知器が鳴り出したわけです。  
(43) 今朝早く、突然、火災報知器が鳴り出したんです。

(42) は、話し手自身の直接体験を伝達しようという発話の動機 P が「今朝早く、突然、火災報知器が鳴り出した」という立言 Q を引き起こしたと説明できよう。「のだ」で言い換えた (43) と比べると、伝達の積極性が感じられるようである。

- (44) ここで犯人が目撃されたわけです。  
(45) ここで犯人が目撃されたんです。

(44) では、犯人が目撃された場所にいる報道担当者のストーリー・テラーとしての役柄が、発話の動機 P になり、「ここで犯人が目撃された」という立言 Q を引き起

こしていると言える。この場合も「のだ」を用いた (45) よりも (44) の方が、ストーリー・テラーとしての役柄を意識した表現になっているのではないだろうか。

(46) 今日、デパートに買い物に行ったわけ。そしたら、バーゲンやってたわけ。それで、たくさん買い物して、持っていたお金を全部使っちゃったわけ。……

(47) 今日、デパートに買い物に行ったの。そしたら、バーゲンやってたの。それで、たくさん買い物して、持っていたお金を全部使っちゃったの。……

(46) も (47) も、話し手の今日の出来事を話しているものである。(46) のように「わけだ」が用いられた場合、話し手はストーリー・テラーになりきって、聞き手の反応を気にすることなく積極的に発話している、という印象を受けるだろう。一方「のだ」を用いた (47) では、話し手が聞き手の反応をうかがいつつ発話している場面も想像できる。聞き手の反応次第では、話を途中で打ち切ったりする可能性もあると思われる。

### 2.3 「わけだ」と「のだ」との比較のまとめ

タイプ1-タイプ4の「わけだ」と関係づけの対事的「のだ」、タイプ1とタイプ3の「わけだ」と関係づけの対人的「のだ」、タイプ5の「わけだ」と非関係づけの対人的「のだ」とに分けて、「わけだ」と「のだ」とを比較してきたが、その結果わかったことをまとめてみよう。

まず「わけだ」と「のだ」との言い換えができるかできないかについて確認する。多くの場合「わけだ」は「のだ」で言い換えることができた。その言い換えができなかったのは、タイプ2の納得を表す用法の「わけだ」である。タイプ2の用法は「わけだ」のきわめて特徴的な用法であると言えよう。「のだ」から「わけだ」の言い換えは、できる場合とできない場合とがあった。「わけだ」には「わけ」の持つ「因果の筋道」という意味により「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が常に存在する。したがって、 $Q$  が  $P$  からの論理的帰結ではない場合には「わけだ」は用いられない。「のだ」に比べて「わけだ」の使用範囲が限られるのは、当然のことである。

「わけだ」と「のだ」との言い換えが可能であっても、ニュアンスには違いが見ら

れた。その違いは、一言で言うと「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」の存在の有無に帰することができる。

また「わけだ」と「のだ」の違いとして、「のだ」は対事的ムード・対人的ムードの両方を自然に担うのに対して、「わけだ」は、タイプ1-タイプ4に限って言えば、対事的ムードを担いやすいことも観察した。

### 3. 「わけだ」と「のだ」との違いを説明するもの

「わけだ」と「のだ」との比較に当たって、まず「わけだ」には常に「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が存在することから、状況や先行文脈への関係づけのない（非関係づけの）「のだ」は比較の対象から除外された。非関係づけの対人的「のだ」が「わけだ」で言い換えられたのは、タイプ5の「わけだ」が、命題のレベルではなく言語行動のレベルで「 $P \rightarrow Q$ 」と表されるものだからである。

タイプ2以外の「わけだ」は「のだ」で言い換えができたが、「のだ」から「わけだ」の言い換えは、できる場合とできない場合とがあった。「わけだ」には「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が常に存在するため、 $Q$  が  $P$  からの論理的帰結ではない場合、「わけだ」は用いられないことになる。「わけだ」と「のだ」との言い換えが可能な場合のニュアンスの違いも、「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」の存在の有無で説明できる。

このように「わけだ」と「のだ」との比較において、「わけだ」に常に存在する「 $P \rightarrow Q$  という推論の過程」が、その違いについて説明を与えた。これは、他の文末のモダリティ表現との違いを明らかにするカギにもなる。

付記：本論文は、2001年8月16日にカナダ日本語教育振興会年次大会で発表した『「わけだ」の意味と用法』に加筆修正したものである。

#### 注

1. 森田 (1989 : p. 1224) によると「わけ」は「分く」(=分ける) から来た語で、複雑に入り組んで見える物事を見分けてとらえた、奥にひそむ、その事の筋道や道理の流れだという。「現象の奥にある“原因・理由・根拠”を「わけ」と考えるか、“因果の筋道”を「わけ」と考えるかで、意味が分化する」(p. 1225) とあるが、「わけだ」の「わけ」は後者に相当すると言えよう。「複雑に入り組んで見える物事」の「奥にある事柄を現象面の原因や理由・根拠と判断して、それが現象面に及ぼす関係・筋道を“事の道理・経緯・成り行き・事情”としてとらえ」(同) たものということになる。
2. 厳密には、Haraguchi (1977: p. 30, p. 301) の言うように、自然な発話では、二つ目の句の H は前の句の L の高さになり、その後の L は Lowered L となる。



3. 二つの高い山が連続するときには、ダウンドリフトは起こらない。
4. 森田・松木 (1989) において「ある結果に至った事柄について、そうなったのが当然だととらえる話し手の態度を表す」(p. 196) 用法の用例として挙げられているものである。
5. 森田・松木 (1989) において、タイプ4の确实性の補強を表す用法 (1.4 参照) に当たる「既成の事実や既定の事柄を再確認するニュアンスで用いる」とする用法の中で「前置きのしたり.....することもある」(p. 198) とされているものと考えられる。

#### 参考文献

- 北川千里 (1995) 『『わけ』というわけ』『日本語学』14-8 pp. 88-98  
杉江厚美 (1996) 『『わけだ』の文に関する一考察』未公刊修士論文 南山大学  
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版  
野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版  
森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店  
森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク  
Haraguchi, S. (1977) *The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*,  
Kaitakusha, Tokyo.